

現代語訳 弓道鳴弦引目の故実 〈その2〉

松村信美*

Ancient Practices about Meigen and Hikime in Kyudo (Japanese Archery) 〈No. 2〉

Shimmi MATSUMURA

7 鳴弦の次第

- ⑨ 潔斎の弁 ⑩ 神拝の弁
⑪ 蹲踞の弁 ⑫ 鳴弦故実

主君から、「鳴弦を仕れ」と仰せ付けられた時は、勿論、潔斎を保持しなければならない。およそ、一七日間の満願で、八ヶ日目に鳴弦を執行しなければならない。或いは、その内容によって、急な事で、その日数もない時であれば、二夜三日の潔斎でよかろう。猶も、急な場合は前夜から潔斎して執行するがよい。この潔斎をするという事は、何故ならば、式正〈正式〉の儀を執行する時の慎みである。則ち、衣食住の三ツを慎むことである。至極の慎みという事になれば、この衣食住の三ツを慎むより外はないものである。扱て、この^{つつし}斎みに入っている内に我が本心に塵ほども余念がなく、唯、一筋に、鳴弦を執行する心になり済すための斎みである、と知るがよかろう。

例えば、主君の御台所^{みだいどころ}が御産の時に、鳴弦を仰せ付けられる時は、予め、覚悟をしておいて、

御産を今か今かと相待っていなければならない。尤も、このうち、潔斎仕りながら相待つことである。その期に至って鳴弦を余念なく仕るべき存念を極めて、御産を待つがよい。

扱て、その御産屋の近辺の鳴弦を仕る場所へ到着したならば、御枕の方角を相尋ねて、その方を我が後^{しり}へ²⁹⁾にして鳴弦をすることである。この伝には種々の教えがある。大勢で執り行う時は、その御産屋の四方でもって、鳴弦を仕る事が本意であるが、鳴弦一人に引目の役一人を仰せ付けられ、相勤めるときは御産屋の四方へ打ち廻って鳴弦をすることもある。もし、打ち廻って鳴弦を仕ることになれば、北の方から、鳴弦を仕り始め、東・南・西へと打ち廻るのがよかろう。これが順序である。尤も、どの方角であるにせよ、御産屋の方へ向いてはならない。

扱て、弓矢を持って、《この弓矢の持ち様は『御産部類記』にも、右に持つ、或いは、左に持つという論が見えている。いかにも、公家の作法は知らず、我が武家において、弓と矢とを右の手に、一ツに、横たえて持つということが

* 文学部教授

習いである。これは礼儀の至極である。巻藁前射法も弓矢を右に持ち、的場入りの作法も右に弓矢筒を持つことが吉田家などの伝にもあって、貴人の御前へ出るとき、右手を塞ぐというのが礼儀である。弓を右に持つということは礼儀の至極である。あまつさえ、横たえて弓を持つというのは、弓矢の指し様の内の、至極の礼儀と知らなければならない。業をもって委しく相伝するものである》その場所へ到着したならば、先ず、北の方へ向き弓矢を持ちながら、天神・地祇を拝し、お祈り申し上げなければならない様は、この度、主君から、『何々の儀に付いて、鳴弦仕れ』とのことで、今日、只今、相勤める。主君の存意の通り、成就を祈り奉る、この旨を心中に相述べ、至誠心になって、天神・地祇を、能々拝み仕らなければならない。このところを疎かにしては、鳴弦の徳の成就することはありえない。

他流において、神拝の作法などということは、神道者の片端から習っていることで、我が国の神拝の作法などという。これは大いなる誤りである。神を拝することについて、禰宜が神拝の作法をなして拝む事は当然である。我が武家の神拝は拍手を打つにもおよばないし、袂を読むにも及ばない。只、主君へ向かい奉り拝礼する。同前にすることである。これが、則ち、武家の神拝である。

扱て、始めから終りまで至誠心になり済ますように、自分の魂を、得と据えて懸かるがよい。何ごとによらず、真実の至誠心になったならば、その感応がないという事があろうか。何ごとによらず、とにかく至誠心にならないから、事が成就しないし、奇特もないのである。我が心がそのところへいたって、誠にさえなったならば、成就するはずである。この所を、よく熟得せよ。とくと、我が一心を定め、そのことのみに押し向かって神拝が済んだならば鳴弦をすることだ。少しでも余念があれば神拝をしても、どうして、神の御加護があろうか。鳴弦が何の用に立つか。得と、いつまでも心を済まして、真実の至誠の心になりきって、神拝し、鳴弦をすることだ。鳴弦は我が武勇である。生得程にならなければ、

行き届かない事である。神拝し至誠心になって鳴弦をする志は主君へも忠義のところであれば、我が心を我が心にして、得と吟味して、少しも障る心がなく、塵も入らないようになりすまし、決心して鳴弦をすることだ。鳴弦というものは業である。武勇である。神拝の時から我が心のうちに濁りが少しでもあれば、主君へ対し奉り、不実である。能々、この所を得心するがよい。

扱て、昼夜に限らず、事は起こるはずだから、兼ねて、その通り申しておいて、人に見せないように仕ることである。引目の役にも、鳴弦の所作は見せないことである。その場に、幕でも屏風でも立て、四方を囲んで、その内に入って弦鳴らしをせよ。人が立ち懸かって、見物する事があれば、その人に魂を奪われ、至誠心にはならない。その座敷へは、一切、人を入れてはならない。よくよく囲んで、その内へ、只一人、入って鳴弦をすることがよい。引目の役は外に置いて、自分だけ、その囲いの内へ入るがよい。天神・地祇を拝するときから、人にも見せてはなるまい事だ。この所が口伝である。

扱て、又、北へ向かって天神・地祇を拝するとは、どういう事かと言え、日本は、昔から、君の座は南向きである。それ故に、院の御前で、院の中を守る人を北面の士という。これは南に面しておられる君〈天皇〉をお守り申し上げるためである。天神・地祇、諸々の神は、惣じて、皆、南面しなさと知るがよい。それ故、北に向かうのである。君の御願望が成就するように祈る。これが忠義の至極の心である。だから、この心の内へ塵も入れては至誠心になることが不可能である。至極の、誠の心になり済ました時にこそ、君臣が合躰すれば、奇特があるはずである。

人と、今日、対面するといっても、我が心の内で、あの者は虚談妄語ばかりを言っ^{きやだんぼうご}て何の役にも立たない人と思いながら挨拶したり、物を言ったりしてはならない人と思いながら、面と向かって物を言い、一礼などする時は、相手の目には、甚だしく不興に映って、誠の挨拶とは受けとるまいに。相手からそのように感じれば我は、又、人の為に、この様にありたいものだ。

という心を、これによっても知るがよからう。誠に愚かな凡人どもはこのようである。まして、天神・地祇へ祈るといって、塵ほどでも余念があつて、その願望が届くことであろうか。能々、この辺りを熟得するがよからう。この誠にさえ到達すれば、そのなすところの鳴弦がどうして徹しない事があろうか。

他流の鳴弦伝で、^{しる}驗々、^し驗らないという事を^{みだ}猥りにいっても、全軀に、人の誠の吟味がなく、誠を捨てておいて、禪家の悟りのようなことを教え、真言、秘密などという事は、又は、何とやら。訳もない狂歌のようなことでも、子どもなどが諷^{うた}う時、花諷のような事をいったからといって、強いて知らない所へ行くのではない。今日、我々と同じ位の人であっても、至誠心を以って頼ったならば、取り合いはするまいに。誠さえ届けば、何ごとであっても成就しないということはない。この誠の場へ到達しないから、ことが届かないのである。^{あまね}普く、世俗の知っている歌に、

こころだに 誠のみちに かなひなば
いのらずとても 神やまもらん
という、この心である。

千度百度も、我が至誠心になることは元より、潔斎の内からその心になって、鳴弦を仕る所へ至っては、益々、その心を責めるように心得て、一毛も、他事なく神拝し終えて、扱て、鳴弦の節は、直垂の袖を巻いて、右膝をつき、左膝を立て、弓をたて、矢は手挟み、〈腰を下した〉その儘の姿勢で弦打ちをするのがよい。これは清少納言の『枕草子³⁰⁾』にも、

滝口の、弓鳴らし、^{くつ}沓の音し、そゝめき出づるに、蔵人のいとたかく踏み、ごほめかして〈ゴトゴト沓音をたて〉、後堂の角の高欄に、高く^{ヒザマツク}蹲踞〈そんきよ〉とかやいふ居住ひに、御前の方に向かつて、^{うしろ}後ざまに「誰か侍るぞ」と問ふこそ、をかしけれ。とあり、又、『盛衰記』にも、「頼政は、階の三階に、右の膝をつき左の^{たもと}袂を広げて、畏みて、これを拝領す」と見えている。

惣じて、弓矢を執る身の「立ちふるまい」は、このように、心得てよいことと知るがよからう。

鳴弦をする時に、このようにしたと言うのではない。只、「ふるまい」という所に心を付けるがよい。先ず、右は一身の内で陰を司り、左は陽を司る事であるから、右を下にし、左を上にすることが、これの順序である。兵家の武者が「つくばい」などというのも、これに同じだと知るがよからう。弓矢を持って、殿中で鳴弦をするのだから、立ちはだかつてはならない。又、座して居てはやりにくいだろうから、この様に、「つくほふ」〈つくばふ・蹲ふ〉と知るがよい。今、射家者流杯の了見では、左の膝をつきたく思うけれども、それは、射法の骨合せ、筋道へ掛かることで、これは、その骨合せのことではなく、殿中の形ふるまいである。そうではあるけれども、武家には武家の持ち方があつてすることである。

扱て、鳴弦をする人は、鎬矢を二筋持たなければならぬ。引目の役の人は、引目矢を二筋持つがよい。引目の役の人は、鳴弦をする人と同然の心を持つのである。これは、弦を鳴らすにもおよばない。鳴弦の人が弦を鳴らすうちは、右膝をつき、左膝を立て、^お居り敷き³¹⁾て弓を立てて持ち、矢をかかえこんで、跡にひかえて、守っているまでの事である。

何によらず、鳴弦をするときは、このように、御産屋であれば、その四方を打ち廻って、その御産子の御湯をひかせ、終らせられる御左右を聞いて退出する。殿移りなどでも御殿の四方を打ち廻って鳴弦をするのがよい。遅速は、尤も、あるに違いない。早く御湯をひかせられる時か、又は、遅いときなどは見合わせ、流れに随って、勤めるがよからう。今、他流の伝の鳴弦を執り行うのに、鳴弦・引目を一人でもって、兼任で勤めることがある。これは訳もないことである、と知るがよい。

扱て、弦を鳴らすことについて、鳴らす数の教えがない。どうかと思う人もいるようであるけれども、昔から、その定りのない証拠として、『源氏物語』『夕顔³²⁾』の巻に、

かく申す者は、「滝口」なれば、弓弦つぎつぎしく打ちならして、……。

とある。つぎつぎしくとは、つづきつづきしく

という事で、いくつもいくつも、うち続きうち続きする事であると知るがよからう。

8 神供調進の弁

今、他流の鳴弦伝に、「弓の曼多〈陀〉羅」という、訳もない物を画にかいて、真言・天台宗の坊主等が祈祷をするときに、本尊と言って、尊んでいる「曼多羅」という物がある。それを借りてきて、「弓の曼多羅」という物を、一宮壱岐守《豆州三嶋明神の神主で、法名・随波齊という者である》といえる、豆州三嶋の神主が真似して拵えた物である。その形と弓を柱杖に表わし、蛇に例え、矢をはつす子に表し、鳥に例え、その他、さまざまな訳もない仏具などを、書き並べたものを懸け物にして、これを本尊として、鳴弦を執り行う。それに、神酒、洗米等を供え、刀の鞘を外して立てかけ、燈を立てるなどして、悉く、皆、天台・真言の坊主等が仏壇を飾って、祈祷するのと異ならない。

甚だ、拙い事に至っては、香り花をも供える流義がある。その花には、將軍の木の木なりと言って、ヌルテ〈白膠木〉の木をもって花とし、伽羅などを焚いて執り行うのだ。笑ってしまうことである。それよりは、坊主どもに申し付け、護摩壇を飾らせ、祈祷をさせることが能である。そうすれば、交りなしに、唯、一筋に祈祷することから、却って、その験しがあるに違いない。武士が坊主の真似をすれば、交り物になるから、その験しがあるはずがない。このようなことは知らなくて相伝した、と言っても、その大元が違っていて大道の道理に背いたことであるから、信向〈信仰〉して、執行してはならないことである。

今、兵家では、只、真直ぐに「飾伝」をさえ背かず、覚えていることを、実学などで心得ているからか、悪いことも善いことも、教え次第、習い次第に取り扱うので、よいことと覚悟するのは、畢竟、愚痴というものである。

扱て、先ず、日本において、昔から、天神・地祇へ備え〈供え〉奉る物は、いかにも清浄で、その身上相応に結構を尽くし、奉ることである。

その趣旨は、中臣はらえ 稔にも、「千座チクラの置戸ヨキクラ³³⁾に置足ヨキクラハして」とあって、数々の宝物を山のように、積み足たらわせて祈ることである。例えば、今日、我等が貴人を招いて饗応する時に、えまつ 麁抹な物を拵えて相手が、事が足りた、と悦ぶであらうか。いかにも、結構を我が身上相応に尽くしてこそ、招かれる人も嬉しいと思うであらうに。

ところが、今、他流の伝では、大小、高下、尊卑の訳もなく、神酒・洗米を供えたと教えるのは、何事か。洗米などというものは、例えば、急に、神供をお供え申し上げたいと思うときか、又は、甚だしい賤者が神へ御膳を差し上げたい時に清浄にしてお供え申し上げたいと思うのに、貧者であれば、そのように拵えることが難しいから、是非には及ばない。洗米を拵えてお供え申し上げる。又は、シトギモチ 粢餅など拵えて差し上げる。《シトギモチという和訓はシロクトグ餅ということであって、ウルマイをつき、白くして水に浸し、よく、やわ 和らかくなってから、臼に入れて搗く。そのまま、餅として握り固めて、古器に入れてお供え申し上げる。この辺りでは「ハタキダンゴ」と俗に言っている。死人にばかりに、供える物と心得ているのである。そうではない。洗米を供えるよりは、又、少し、念を入れたというようなものである。東国辺りでは、粢餅や一夜酒を拵えて、神に差し上げることは貧しい者の仕業であるという。いかにも天神・地祇へ卑賤の者は差し上げるはずである》

いかにも、天神・地祇へは質素な事がよいと、神道者の伝によっては心得違いがあり、却って、麁抹な教えもある。これは、大きな了見違いである。かの米を搗かず、神供を黒米の飯にして差し上げるのと同じことである。三杵半という事を言い伝えて、米を只の三杵で搗いたという数をいうのではない。いかにも、御杵をもって、白く搗く。昔は、民の喰うような米ではないというのを取り違えて、「御杵の飯」というのを、みきねのはん 「三杵半」と文字を書き違えたのは文盲である。それを、尤もと思う人は、猶、又、愚盲の人と知るがよい。

とは、云いながらも、歴々の人が「あつぱれ」能い流儀だと心得て、小さな器に洗米を入れて

供えることを信仰し、大国の武将の鳴弦を仰せ付けられる時も洗米を供え、小身の平士の執り行う鳴弦の時も供え、大名小身の境を知らない教えは取るに足らないことである。このようになれば、神供は、主君から天神・地祇へお供えなさろうとすれば、いつも、左様なことを司る役人に任せて、その格式をもって、神供を調進しなければならない。それとも、鳴弦者に指図致せとすれば、その様子を聞き合わせて指図をするか、他の事に引き合わせて、考えに考えて指図をするがよい。

とにかく、その人がそれ相応の神供をすれば、他流のように、一隅を守るということは、甚だ、以って、不調法なことである。惣じて、神供というものは、至極、清浄を専らとし、その上に、海・山里の物を揃え、いかにも、盛りに盛って差し上げる筈のことである。古い草子などにも、「山海の珍味など捧げ奉る」などと云うことがあるから知るがよからう。

又、神に物を奉るときに二品がある。例えば、先ず、物の初穂をお供え申し上げるというのと、又、我が願いがあって神供を差し上げるのとは違っている。自分に願い事^{アガナ}があって差し上げるのは、贖え物というのに類して、自分が持っている宝を神へ差し上げて、「これは、我が秘蔵仕る物なれども、捧げ奉り候ふ。此の度の願ひ、何とぞ、相叶ふやうに」と祈るのが真実である。今も古風の贖え物の慣習が残っていて、遠州の秋葉大権現へ刀を献じて願う事がある。日本は、昔から、朝廷の御政^{まつ}り事の内に、罪人で米穀を持った者は、上に差し上げて、その罪をも御免なされる事がある。これと同じ心である。仏・菩薩といっても、宝を多く積んで、罪を免れることを経文にも説かれてある事である。だから、日本も異国も宝を捧げ奉って、その罪を免れた事があった。その罪の軽重に従ってそのような事があったと思われる。その宝を費やして願わなければ、その人の、実、不実の境が判らないというようなものである。

この所を、よくよく考へて、神供を備えるがよからう。このことに、真の略という位はない。その人の程々の事〈位〉を自分でよく勘考して、

国主や城主はそれが日頃の格式であり、これは役人が取り扱うことなので、その趣旨に従って取り廻すがよい。

9 鳴弦札の事

今の鳴弦者の流れに、白札・黒札・赤札などということがある。或いは、その拙い流儀では、御府《俗にコフウという》という、意味もない事を紙に書き付け、又は、木の葉などに書いて、水でそれを洗い落とし病人に飲ませるなどする事がある。前段に論じたから、論には及ばないといっても、札守の事は風俗と心得違えをして、神国の風俗であるからと思い、神道者の間でも、右の類のことはするから善い事だと心得ている。武家において、札守を取り扱う事は大きな誤りである。

昔は、「滝口」の官人が一日に幾度か勤めた。その度ごとに札を書いたのであろうか。書いて何になるのだろうか。義家や朝臣頼政卿がその札を書かれたということは、聞いたことがない。札を書いた守りなどという物が、現にないので、これは、一体、何だろうか。様子が悪く、何か事が足らないように思う。ここを以ってしても、真言・天台宗などの祈祷に類えての、修験者や陰陽者の真似などをして、札守を書く事は人を欺くことではないか。

その証拠は、随波流の愚札などの書きように、次の^三があり、これは、天が三、地が二の形を顯わす。これは陰陽者から出たことではないか。「^三甲弓山鬼明王急急如律令」などのことも、甚だ、心得がたい事で、これは、真言の明王部から出して用いるか。或いは、白札という事は、白河家の鳴弦伝にあり、これには、何も書いてなく白紙である。だが、白筆でもって、八幡大菩薩、天照太神、素盞烏尊などと、さまざまの神の名を書いて、これを号づけて白札と言って、鳴弦の札守として、頼んだ人の許へこれを贈る。もし、そうならば、鳴弦を止どめて、その札守だけを遣わしても、当然のことである。これも、大元が違っているので、論じるには足らない事である。右に云うようになれば、暫く、ここに

教えを立てるものである。

又、赤札といえる物は、神道者流の鳴弦伝にある。唐の国で、赤い紙に「府」という文字を書いて門に出すなどすることがある由。それを採って用いたことと見てとった。これは、又、取るに足らないことである。

すべて、「府」というのは、熱田の社人杯も、七十二府などということ伝えて、今に、取り扱っている禰宜もある。これは神代の文字などという説もあるけれど、甚だ、いぶかしい物で、何という訳も知れない物である。必ず、何れも、取るに足らないことと知るがよい。その内、若、主君の御好みのものなどがある場合は、一応は、右の事柄を申し上げなければならないけれども、長年にわたり誤ってきた鳴弦の意地が離れ難いので、それは、ともに、札に書きようがないか、何とすれば、後々の印になるように書くがよい。そのときは、「何年何月何日何のために、某は、鳴弦を仰せ付けられ執り行う」などとだけ書くのである。これを封じて、札とするのがよいか、これは後の世へ、我が名を残す為だけであると知るがよからう。

10 鳴弦時刻方角の事

鳴弦をする刻限に考えるところがある。昔は、「滝口」で、天子の御湯をひかせられる時、又、御産の時に鳴弦をするには、時刻は何れの時という事がない。その時々には執行するには、他流では、夜八時に執行せよという。これは陽気の兆す所であって、子〈午前零時〉の時は老陰の終りで、小陽の始まるころである。陰気は、この時に発する物なので、人の危いという所は子の刻より事が発して、丑寅〈二時～四時〉に至っても、弥、危いという。子の刻、子の方は、老陰の終り、小陽の始まりである故に、小陽が老陰に負ける時刻であるからである。それ故に、陰陽道においても、鬼門を恐れ慎むのは、この道理である。

又、狩野家の絵の伝にも、鬼という物を画くときは、頭を牛に画き、それに虎の皮の下帯とした髀を画く。これは、丑寅の方角〈北東〉を

形に画いたものであるという。ヲニというのは、和訓で、陽逃ヨニゲの訓の下略で、陽気が逃げてなくなって、陰気ばかりになった処である。この時こそ、奇怪になる事があるのだ。それと同様に、丑〈二時〉の刻に鳴弦をする、というけれども、利竜先生の考えには、我が陽気も又、その時刻には、共にめる〈めいる〉時刻である。よって、これは、その刻、又は、子の刻であって、寅の刻は鳴弦をしない時刻と知るがよい。

太陽の時に至って、鳴弦をするがよいだろう。その太陽の時は陰気も発することが難しいのだ。その太陽の時とは、卯〈午前六時〉の刻である。東方へ太陽が顕われなざる時刻であるがゆえに、日の出に鳴弦をするがよからう。

又、方角ということが何とやらずと、陰陽者の沙汰はこの様であるけれども、曾つては、そうではなかった。方角の事、何時なんどきによらず、日に向かつて鳴弦をしてはならない。これは故実である。その趣旨は、先ず、業をもっていう時は、旭に向かつて弓を引き、また、夕日に向かつて弓を引けば、眼の中に日の光りが通って、目当ての物が見えない。又、理においていうときは、『日本書紀³⁴⁾』第三の所に、神武天皇が始めて、「御軍に御謀計」という事の用いられることがあった。神道者が号づけて、これを「大星シの伝」という、神武紀の、その文に曰う、

御軍進み戦ふ事、能はず。皇尊、愁ひ給ひ、則ち、怪しき謀事はかりことを御心の中に定め給ひて、宜しく、『今、我はこれ日神の産の御子にして、日に向かひて仇を討つは、これ天の道にさかへりさか逆。しばし、退御ありて弱きをしめ〈示〉して、天津社・国津社をいやま〈敬〉ひ、祝ひて、背中に日の神の御勢ひを負ひ奉り、御影のまにまに、襲ひふまんふ〈躡みなん〉。かゝらば、曾つて、刃に血塗らず、仇、必ず、自おのづから破れん』と〈のたまふ〉。皆、申し候ふ。『然り』と。

と見えている。とにかく、天の日輪においても、地の火においても、それに向かつて弓を引くという事はないことだと知るがよからう。これは、この弓だけでも限らないで、一切の武器を取り扱うときに、この心がなくてはならない。右の

神武紀の趣旨をもって、考えて知るがよい。

この故実によって、末の代の武田家陣法には「日に向かはぬ」という習いがあった。これを「大星^シの伝」と言って、秘事とする事である。信州の川中島において、山本勘介が村上義清の勢いを遣った事は聞こえている。これが兵家の習いというものである。とにかく、日の余光を我が背に負って鳴弦をするがよい。

今日、只今、鳴弦を執行する、と言っても、大陽、日輪の御恵に預らないということはない。どうして、人として日月の御徳を知らなければ、禽獣にも劣っているといえようか。だからして、神代巻にも、天子は日輪の御子孫であると立て、日輪も今上皇帝も、同じ事で御恩沢を受けるのだと、神道者も相伝するのである。神武天皇が日の神の御勢いを背中に当てて、^{いくさ}軍をなさったことによって、忽ちに、御勝利となり、今日の武芸の業をなしている。とても、この心持ちがなくは、勝利はなかった事と知るがよい。

今日、例えば、旅立ちをするに時刻・方角も、この心持ちをもって取り廻すのがよい。東国へ旅立ちをする時は夕日を背負って夕方に旅立ち、西国へ登る時は、朝、旅立ちをするがよからう。これは日を背に負うからである。しかしながら、御奉公の筋によって、出立しなければ叶わない事があれば、日を筋違えて出立するがよからう。例えば、昼の九ツ時〈十二時〉に、南へ出立しなければならない時は、少し、筋を違えて出立するのだ。真向に出立するということは、例え、日中で、眼に日光が入らなくても、その方角に向かうことは、してはならない。

11 鶴の評の事

『平家物語³⁵⁾』の第四に曰う事には、頼政は、その時は、まだ、兵庫頭であった。その頼政が申されたことは、

昔より、朝家に武士を置かるゝ事は反逆の者を退け、違勅の輩を亡さんがためなり。

『目にも見えぬ変化のことの仕れ。』と、

仰せ下さるゝ事、未だ、承りおよばざる事。と申しながら、勅宣なのでお召しに応じて参内

した。

頼政が頼りきっている郎〈若い男〉で、近江国の住人である猪早太に母呂^{はろ}の風切りと矧いであった矢を負わせて、その郎が、唯一人で供をしたのである。我が身は二重^{ふたえ}の狩衣で、山鳥の羽を以って矧いであった矢^{しげとう}、二筋を重^{おほゆか}簾の弓に取り添えて南殿の大床に伺公した。頼政が矢二ツを手挟んだことは、そのときは、未だ、小弁であられた家頼卿が、

変化^{へんげ}の事、行ひ仕らんずる者は頼政ぞ候ふらん。

と、お撰^{いぢのや}び申されている間に、頼政は、

一矢で、変化の物を射損ずるものならば、二の矢にては、家頼卿のしやくび〈頸〉の骨を射んとするなり。

案の定、人々の申す事に違わず、御脳〈惱〉の時刻におよんで、東三条の森の方から、黒雲の一村〈一群^{ひとむら}〉が立ち登って御殿の上に棚引いた。頼政が、急度^{きつと}見上げると、雲の中に怪しい物の姿がある。若、射損じる事があれば、世間では、射損じる事もあるだろう、とも思われかねない。あれやこれやと思いながらも、矢を取って^{つが}番え、「南無八幡大菩薩」と、心のなかで祈念しつつ、よっぴいて、ひやうと発った。手答えがあつて、はたと中^{あた}ると、「得たりや、応」と、思わず、矢叫びをしてしまった。猪早太がツツと寄って落ちる処を取って押さえ、柄も拳も通れ通れと、夢中で、^{ここのかたな}九刀を〈何回も〉刺した。そのときは、上も下も顛倒し、手に手に火を点して、これをよく御覧になると、頭は猿、^{ムクロ}體は狸、^{くちなわ}尾は蛇で、手足は虎のようであつて、鳴く声は鶴に、よく似ていた、とある。

白河家鳴弦の伝に、「頭は猿、尾は蛇、その鳴き声は、鶴に似ている」とあるのは、悪魔がそれ〈使か〉をする事で、それは角々からするものであつて、正直〈真面^{まとも}〉な所からは来ない、という事を言おうとする為に、頭を^{さる}申のように思わせて云ったものである。方角で云うときは西南の角にあたる。尾は蛇であるというのは、方角にとっては、巳^みの方で、則ち、東南の角である。足ト手は寅^{とら}といつて、これは又、北東の角である。

鳴き声が鵠であるという事は、鵠という鳥は夜鳴くものであるから、悪魔は、兎角陰気から発するという心であって、頭は猿で、尾は蛇に、鳴き声は、鵠によく似ていると云うのである。一通りは、尤ものようなことではあるけれども、そのような廻り遠い事である筈はない。却って、日本の、大古からの風俗によってものをいうと、物の例えを云い聞かせて、人のことを言おうとしては本草のことを借りて言い、天地のことを言おうとしては人の事をいう。このようにして、例え物をそのままに思い込んでいては、怪有のことが出て来るのである。歌などには、普通に、如何ほどもある事である。神代巻を始めとして、物によそえて万^ズ事を書いておいたものなので、よくよく、このところを得心するがよからう。これは鳴弦の徳で、御悩の御平癒があった事を祝い、画いて云ったものである。頭は猿という事も、方角に例えていう事も誤りである。

頼政の鳴弦をもって「退^{サル}」といっても、退は無くなることである。尾を「くちなわ」というのは朽ちた縄の事で、これも、朽ちてなくなることである。足と手は虎のようだということは、手と足も捕らえられず、軀もなくなったという事である。体はたぬきとは「たゝぬき」という事である。抜いて取れば、物はなくなるということ、狸という獣に、よそえて云う。獣虫の名を借りて、仮に形を作って云ったものである。始めも終りもなくなったという事と知るがよい。

鳴弦の徳により御悩が御平癒なされたことを、形のあるものに例えて、頭がなく、尾もなく、胴もなく、手足も捕らえられないようになったという事である。鳴き声が鵠というのは、その声さえ、または、「イヌルエハヘル」ことで、ヘルというのは、行くことである。ユキユキでなくなることである。これを方角の繰り合わせ、陰の方、陽の方などの分^チを立てて教えるのは、廻り遠い事と知るがよい。すべてがよそえ物ということになっては、訳もないものも出てきて、広大で、広くも、狭くも、いろいろになる事である。この鵠の形の通りの物がこの日本の国の中にあるだろうか。これをもって、例えにしたという事を知るがよからう。

II 深秘

謹んで記す

12 雷静動弁書

「雷静動」という意味は、鳴弦伝の惣^{そうしほ}纏りを、この三文字に付けて相伝することである。則ち、これは「カミナリ、ウゴクヲ、シヅカニスル」という文字を埋めて、この意味は理^リに付けて、鳴弦の奥義を授かることである。

射家者流の説に、右の三字に「頼政藤」等と、文字を当てて「ライジャドウ」と読ませている。これは訳もないことで、音を借りて書くときは、どのようなことでも書けるものである。きっと、取るに足らない事と知るがよからう。

尤も、前にもいうように、雷静動という事は、『源平盛衰記³⁶⁾』にもあって、上古の鳴弦伝に、「雷静動・水破・兵破」というように伝わって、これがあるから、そのころの人々が聞き知って、『盛衰記』にも、書いたものであろう。だから、これは、古い教えと知られている。それなのに、頼政藤と書けば、頼政以来の事になってしまう。そうではなくて、往古から、こういう伝であるからこそ、頼政もこれを伝えられたものなので、古い教えと知るがよい。

扱て、雷というものは、四季の運行や寒暑の往来につれて鳴る物である。畢竟、無形の物で、形に大小の定りがなく、ただ、造化の火の玉と知るがよからう。則ち、造化のなす所であって、地^ち気の水脈と火脈の行き合ったところによって、発するものである。だから、これはかみなり^{カミナリ}といって、造化の神の鳴るところである。天地・陰陽の気の所と知るがよからう。

その天地の造化をも武士の鳴弦の徳をもって、鎮まる事が相なるかということ、いかにも鳴弦の徳を以て、その天地造化をも取り廻すという伝があるからだ。およそ、人の力というものは、その為すところに、大軀その限りがあるというけれども、これは、この鳴弦においては、その限りのないところがある。その限りのない所を教えんがための、雷静動の伝である。これほど、大切な義を、今、他流の伝に、鳴弦を呪い事に執りなして教えるとは何事か。昔から、武勇の

勝れた、弓矢に達した人の鳴弦を伝えていれば、誠に、貴く、敬っている事である。

扱て、天地の造化を鳴弦の徳をもって、どのようにして静かな常〈平常〉にするかという、これも前にいうように、雷の鳴る時は、俄かに鳴弦をして止めるのではない。事が発したのを鎮めようとするがゆえに、鎮まらないのである。だから、雷の動くのを静かにするという文字を以って、伝授とする事であって、雷でも何でも、惣じて、鳴弦の徳は発するのではなからうかと、決する所においてする事である。これ等の事も、今の代で他流の鳴弦伝に引き合わせて考えては、合わない事と知るがよからう。昔に立ち戻って鳴弦の理を得心し、そのうえで、末の代の今へ及ぼし、とくと、熟得するがよい。私的に雷を鎮めようとしても、一己だけの力である。一己だけの力では、なかなか鎮まらない。雷とは、書いた物であるけれど、右にいうように、畢竟、天地の造化であれば雷とは限らない。旱^{ひで}り続く時に雨を乞い、雨が降り続くときに晴れを乞う。寒い時季に暑く、暑い時季に寒いという天地の不順なときに、平常に戻すのには鳴弦を以って、収めるのである。これが武道の常である。

その収め様は、例えば、天子の勅諭があつて、「何々の儀、宜しからずとか、又、何々の儀に付き、何の誰に鳴弦を仕れ」と、仰せ付けられ、畏みて、先ず、心中で、鳴弦を仕るべき覚悟を、よく極めて、その上で身を清浄に改め、万事を慎むことである。最初は鳴弦をする次第の所で相伝したようにして、鳴弦の執行をするときは、先ず以って、勅諭と言ひ、そのみが、天子の御願望とあれば、これは、日本の国中の人々の願望でもある。これを武士として御名代を仕る、日本の万人の惣名代としてこれを勤めるものであるから、何事によらず、己一人の力で出来ることではない。

だから、天地の造化といつても、どうして、このために鎮まらないという事があるだろうか。これから及んで武家でも、そのままで相勤める鳴弦も、国主、城主、大小、高下はその品々であるが、その程々に随って同じ心である。

かつて、己一人の力ではないと云いながら、

例えば、人の所へ使う人を遣わすときに、才智利根な人を遣わせば、同じ事については明るく、事も早く済むものである。又、愚かで、痴鈍な生得の人を遣わせば、二度も、三度もかかって、漸く、事が明らさまになるものである。だから、誰人でも、この伝授をさえ、身につけたならば、事が済むように思われるが、右の通りで、誰がしても、事が済むということに決定した義ではない。これによって、武勇は、その人の生得や志のことであれば、その程々を越えたところは、やはり、成り難いことである。だから、武勇の至って勝れた人程、その執行する鳴弦は、よく徹することと知るがよい。このようなことで、事の重い義であるゆえに、その鳴弦を執り行う人は、その期に及んで、我が身にばかり、支えないようにと、我一人の身の上を思い、産神の神、氏の神、その国の大社の神などを、銘々に、心付き次第にお参り申し上げ、隙なく、鳴弦を相勤めるようにと、別けて神拝するがよい。

他流のように、神棚を床間に飾って、仏者の祈祷をする時は、本尊を懸け、それへ向かつて、執り行うようにする物ごとではない。神を勧請すれば、その神かぎりのことである。我が執り行うところの鳴弦は、その神かぎりの御神徳のようなことではない。

昔は朝廷の御願ひ、今は武家の武将の御願ひである。右にいうように、その程々の、国中の人の名代に立つ鳴弦者であれば、これに越えた重いことはない。だから、神の力を己に借りるなどと、他流では教えるけれども、そのような手弱いことであつては、鳴弦は執行されない。一神の御神徳ほどの義は、則ち、我が執り行う鳴弦の所作にある。

扱て、祈願というものと鳴弦というものとは、大概是同じようなものであるが、聊かその訳の違うところがある。この所を、能く、合点することである。およそ、神職の人であれば、祈願とも言うけれども、武士のなすところは鳴弦である。我が家の重器をもって、我が至極の武家第一の武勇をつくし、その御願望に障りを齎^{もたら}す物は微塵に碎いてしまうと、出で立ち相勤める。則ち、主君の御願望を天神・地祇へ申し上げる

道理である。禰宜が神へ祈ることを祝言と言い、或いは、祈祷という。それを武士が勤めているけれども、禰宜や山伏は仏神へその願いを申し上げるまでの事である。

武士の鳴弦は我が武勇の力であって、と申し上げた後、猶も、外から障りの事までをも防ぎ、禰宜、山伏の祈念、祈祷で及ばない所を武士が鳴弦をして勤めることである。この所を、よくよく得心しなければならない。この心得を知らないでいては、禰宜・山伏の祈祷も同じとなるのだ。ここをもって、我が行うところの鳴弦は、どうして、天地の造化といっても、これの義を鎮めないということがあるだろうか。決まって、鎮まる事であると知るがよい。

他流のように執り行えば、真言の坊主、禰宜、山伏の祈祷も同じとなるのだ。ところが、他流では、真言を唱えて、九字を切りなどする事がある。これは大きな心得違いである。稜を読み、祝言を書いて差し上げれば、禰宜の所作となる。真言の秘密を唱えて印を結ぶから、仏者となるのである。我が武家において執り行う鳴弦には稜を読むにも及ばない。真言の呪を唱えるにも及ばない。只、我が鳴弦を執行する時の神拝は、例えば、主人の前へ家来が罷り出て、物を申し上げる時のように、至って敬い神拝するがよい。

鳴弦を執行する時の我が装束は武士の至極の、はれの出で立ちである。そうとはいっても、神に物を申し上げる儀は、又、その上のことで、仇を碎いてしまう勢いを持ちながらする所作であるから、白直垂を用いる。これは古例である。則ち、白色で、清浄を用いる直垂は、元武家の服であるから、今でも相用いる。このような事なので、ここへ、一毛でも、他の事を交ぜては、我が執り行う鳴弦は、少しもその験しがないと知るがよい。有情は申すに及ばず、非情の物といっても、この鳴弦の徳に随わないという事はない。

また、例えば、我が同じ輩の病人であっても、薬をもって養生をしようにも、その験しがなく、乱心も同様である、というような者がいる時は、ない事はないけれども、若々、そのような事で、鳴弦を頼まれたら、右の段々の通り故、決して、

相勤めまいことではあるけれども、然しながら、是非にと言つて頼まれ、止むを得ず、相勤めること如何という時に、武士の互いの義理合いもあるので、これを執り行うまい事とも定め難い。

世に、狐つきという類、或いは生霊・死霊が憑いたという類の病人のことであれば、これは、これで、全く、薬で快然する筈であるけれども、世俗では、これを聞き伝えて、鳴弦には寄特があるものと心得て頼むから、止むを得ない事だ。鳴弦を執行する時の心持ちは同じである。その頼む人の願望を、天神・地祇へ申し上げ、……この者においては常の形ではない……。いわば、人を正道へ戻す道理なので、右の通りの心得も同断である。猶も、この上、その病人に障りをなす物があれば、微塵に打ち砕いてしまおうと鳴弦をすることである。この処は、衆人の力がなければ、その人かぎりの事であって、これは、国主・城主杯とは違い、その頼む人が怪しい故、我が一人の力で、全く、届くことであると知るがよい。

物には、その程々の釣り合い、というものがある。釣り合いが悪ければ、事が成就しない。だから、その程々の釣り合いを我と我が勘弁を巡らして、知らなければならないことである。

昔から、世俗の物語に、何時の頃の帝なのか、御狩りに行幸せられたときに、鷲が地に下りていたので、勅諭で、「あの鳥を捕えて来い」と仰せ付けられたときに、捕らえようとすると、鷲が飛び立とうとした。そのときに詞を掛けて、「天子の命令であるぞ」と言ったところ、その鳥は動かず、じっとしてその儘までいたとある。これを、帝が覧なさって、「神妙なことかな」と言つて、その鷲に五位を給わった。今でも、「五位鷲」という事がある。これは、いかにも、虚説妄談なことであるが、道理では、そういうこともある筈である。このように鳥でも勅諭を恐れることは、他国のことは知らないけれども、我が日本は、天津社から今上皇帝にいたるまで、一つの器の水を移して絶えないように、続いておりますことであるから、申すも愚かなことで、尤もな事である。

その下の武家に、尤も、その程々の武威徳が

あれば、どのようなことも、君命の重いことをもって執行する時、どうして、その験しのないことがあろうか。当伝に、鳴弦を執り行うとき、神を、如何にも拝して鳴弦をするのは、それが一己の慎みであるのだ。則ち、古い例もあつてすることである。

『盛衰記³⁷⁾』にも、頼政が男山〈京都の石清水八幡宮〉を、三度も参拝しなされたとある。これは、頼政のような人物であっても、障りのないように、鳴弦が相勤まるように、と願って、神を参拝しなされたのではないか。鳴弦をする事に至っては主君の御願いごとである。天神・地祇へ申し上げ、扱て、その上で、我が武勇の程々に事を鎮める。この事を鳴弦という。その伝は、古代の「雷静動」のことである。だから、鳴弦の極意はこのように相伝するものである。

13 水破 14 引目の故実

「水破」とは、陰^{イン}を破るということであつて、水は陰なるがゆえに水破というのである。陰は、則ち、形のある物をさして陰と言い、形のない物を陽という。詰まり、これは形のある物を射る為の術である。

これは、軍^{イクサ}ではなくて、平生の人を生け捕りにするために射るか、今日は的を射る。或いは、鳥獣やその外の何でもよい、形のある物を射るのは、皆、水破の徳というものである。

引目は、その内でも重んじることがあるのだ。今、他流では「引目の矢」という物をこしらえ、これを「仕込み」と云って、色々の呪文などを書き込んでおいて、これを御神躰のように心得、手も指さないように、大切にしておいて、事の重い時には鳴弦を用い、事の軽い時には引目を用いると、心得ているのは大きな僻事^{ひがこと}である。引目は、正しく物に指し付けて、射倒すものである。鳴弦は、形のない物を音^ナでもって、事を鎮めるものである。引目は、人に目を廻させる矢ということで、引目の矢という。久しい間、これを誤って、引目の矢を、甚だ、大切な物として取り扱い、恰も、神も乗り移っておられるかのように心得るのは、故実を知らない他流の

誤りである。それ故、今、生け捕りに射る矢は磁頭〈神頭とも、^{やじり}鏃の一種〉という物を拵えて、昔の引目に替えたのである。これは久しい間の誤りであると知るがよい。

『平家物語³⁸⁾』、また『太平記³⁹⁾』などにも、「宿直、引目を射させたる杯〈^{モンガク}祓か〉」という事が、何度もあることだ。文学〈文覚〉などが院の御所で狼藉を振る舞ったときも、「引目にて射よ」ということが見える。盗賊、その他の狼藉者を射倒すための引目の矢である。だから、当流は、昔に立ち戻り、引目の矢を生け捕りに用いて、便利のよろしいように制作して持つがよい。これは、正しく射ることに預かった物であるから破るというけれども、未だ、殺すことではない。射倒して生け捕りにする道具であるがゆえに、古書でも、これを生矢^{イク}という。則ち、この引目は水破という弓の徳であるのだ。

15 兵破

「兵破」というのは戦場で射るすべての事が兵破である。

弓矢を取っては雷静動、水破、兵破の三つの徳のほか、全く、これよりも重いことはない。稽古は、色々の的を拵えて、射術をするときは、皆、水破、兵破の稽古である。けれども、その内の的の中りには、戦場の煉りばかりでもない。位の高い貴人の御前で、御慰めに軍事を兼ねて、的を射て御覧に入れる。又は、粘射を吟味するといつて、軍事を兼ねて的を射させる事もあるので、これは、兵破の煉りばかりとも言い難い。とはいふけれども、この弓矢の徳というものは、この三つに極まった事である。

鉄砲などの尖利兵器が出てきて、それに対しては、またとないものであるけれども、弓矢が神々の微妙な至極の徳を備えている事でもって、神代から、今に至るまで、絶えないで行われることは、この三つの徳があるからである。

兵破の術になつては、四海の乱れたところをこの弓矢をもって、元のように、安平になさしめる弓の大徳である。神なるかな、妙なるかな、ここをもって、鳴弦伝授というのはこの三つの

教えを、よく心得させるのである。この三つの徳を備えた武士も、誠の弓取りとってよい者である。前にもいうように、この誠というのは、則ち、天の徳であって天地・万物にみちみちているところの造化の神力をさして、これを誠と号づける。則ち、自分の心を誠にする任せ方は、心を清浄にして、少しも欲心・邪気の心を起こさない。天から我が請け得たところの心は誠の神である。それ故に、心を誠にするというのは、何の修行・秘密のこともなく、誰でも一致する、善い事である。その子細は天から我に請け得たところの、この生気の心は、邪気・邪念の邪である心は、少しもなく、誠の誠の神である。

例えば、人が出生する時に、何の知恵もなく、欲心もなく、東西を知ることなく、無心なような物であるけれども、自然と天から請けたところの生気があるから、生きているのである。これは我が身に請けた誠の神である。それより成長するに随い、色々の知恵を生じて、大人となつては、元、請け得た所の神気をくらまして、凡人とする。これは、則ち、凡人の心である。神人・聖人の心は始めに得た所の神気のまま、欲心・邪気を以って曇らせないのを聖人という。至って、なり易い事を得ようとしな。却って、苦勞が多くなり、悪い色々な欲情・邪気を起こして、凡人となるのは浅ましいことである。

であるから、心を誠にすることは成りがたく、難しい事ではないのだ。何の工夫もいらなくて、易くできることと決定するがよからう。依って、鳴弦・引目の伝とはこのようなものなのである。謹んで、怠ることなく、大切に修行しなければならない事である。

● 注および出典（前号に続く）

日本古典文学大系は「大系」と略記する。

29. 次の注 30 と併せて『枕草子』を読めば、鳴弦の所作の一部がよく理解できる。
30. 池田亀鑑・他校注：大系・枕草子。岩波書店。1963。100 頁に、「高く蹲踞」とあるから、注 33 の折敷きの姿勢と考えられる。
うしろざま
 後様に「誰か侍るぞ」の間に着目されたい。

31. 床に右膝をつき、左膝を立て、左手に持つ弓身を立てて、右手で矢尻を握み、脇腹に抱え込んでいる姿勢を折敷きという。即ち、突発的に何か事が起きた場合、直ちに対応できるように、控えている姿勢である。
32. 山岸徳平・校注：大系・源氏物語。岩波書店。1964。「一」の夕顔巻、146 頁以降に「宵過ぐるほど、枕上に、いと、をかしげなる女ゐて」とあり、更に「隨身も、弦打ち〈鳴弦〉して」とあるのに続いて、本稿の「滝口」の記事が出てくる。
33. 倉野憲司・他校注：大系・古事記。岩波書店。1964。の 83 頁と、坂本太郎・他校注：大系・日本書紀。岩波書店。1964。の 113 頁に記してある。千座は多くの物を置く台、置戸は置く品物。つまり、多くの台の上に置く夥しい品物で、罪穢れを祓い贖わせる為に科する祓はらえつものつ具である。
34. 日本書紀・注 33 と同じ書。上巻の 192 頁の神武天皇と長髓彦ながすねひことの戦いの箇所である。
35. 高木市之助・他校注：大系・平家物語・岩波書店。1964。上の 325 頁にある「主上を悩ませる怪物退治」の箇所である。
36. 種村宗人・校訂：源平盛衰記。芸林社。1975。ライジャウドウ
 卷第十六の 269 頁に、「水破、兵破、雷上動と云ふ弓箭は、是大国の養由ヤウイウ〈楚の国の者〉が所持なり」とある。
37. 源平盛衰記・注 36 と同じ書。その 269 頁に、「産衣サンエと云ふ鎧を着て、男山三度伏し拝み奉り、其後、鎧をば脱ぎ置きて、直垂小袴計りなり」とある。
38. 平家物語・注 35 と同じ書。上の 341 頁に、「これは、いかさまにも天狗の所為といふ沙汰にて、藝目ひきめの当番と名付けて、夜百人昼五十人の番衆をそろへて、ひきめを射させるゝに」とある。
39. 後藤丹治・他校注：大系・太平記。岩波書店。1964。418 頁に「堀川院〈1107 崩〉ノ御在位ノ時、反化へんげノ物アツテ、君ヲ悩マシ奉リシヲバ、前ノ陸奥守義家承ツテ殿上ノ下口ニ候し、三度弦音ヲ鳴ラシテ之ヲ鎮ム」とあり、注 36 の頼政の例も続記してある。

あとがき

偶然、『弓道鳴弦引目の故実』を入手できた。それは、中京大学付属中京高等学校から道場の矢止の相談に乗って欲しいと言われ、出かけた。要件の後で、用務員の川辺育三氏から、面白い本がありますよと言って、持って来られたのが二冊からなる題名書の写しで、大伴英邦先生の筆の入ったものである。三か月ほど経ってから、大伴先生の御遺族に原本の有無を電話で伺ったところ、実在するからお貸ししてもよいという御返事を頂いた。早速、お借りして見たところ、原本は、著者の朱書印もあり、文字も鮮明で、訓みやかったので、時を移さず、現代語の訳に取り掛かった。

前に略記した大伴先生とは三十数年ほど前に、愛知県・東海高体連の弓道役員をしていた頃、尾張藩竹林流について、種々の状況等を詳しく話して下さった。それ以来、親交を温めてきたところ、ある年の晩春に、来宅されたいという書簡を頂いたので、早速、参上した。先生は、私の余命は幾許もない。今まで弓関係の書物や弓具類を幾種か収集したが、私の跡を引き継ぐ者がいない。このまま朽ちてしまうのは残念。君は中京大学の文学部で教えながら体育学部で弓道も担当していて、希ってもない事である。これらを中京大学に寄贈するから、是非、活用して欲しいということであった。勿論、これを頂いた。

大学では、創立40周年を機に、大学の社会的使命に沿うべく、学内所蔵の貴重な学術資料を広く世に紹介することを目的とし、当時の文学部長・長谷川端教授らの執筆によって、国書の612点を解題し、更に、弓道関係書の158点も加えて全目録を掲載し、『中京大学図書館蔵・国書善本解題』を刊行した。

関係者の参考に供するために、弓道関係書の中から鳴弦・引目に係わる書を挙げれば、次の通り16点である。但し、重複の書は除く。

中京大学豊田図書館蔵 関係書

1. 引目鳴弦之巻：天保3～4年写，（海野公節）
2. 鳴弦藝目考：題簽「鳴弦藝目」〔江戸〕写，伊勢貞文
3. 鳴弦藝目考・逆頬籠之事・調度懸問答：伊勢貞文，〔江戸後期〕写，逆と調との間に朱書きで「随兵日記」（小笠原元長著）を付す
4. 橘家鳴弦口伝・弓道書・橘家藝目口伝秘巻：外題「弓道書」，鳴弦三巻・弓一卷・藝目一卷，〔江戸〕写
5. 鳴弦巻：書外題「弓道鳴弦之巻」，題簽「弓道鳴弦図入秘巻」，一宮随波斎伝，宝暦11年写，（寺田長盛）
6. 鳴弦藝目大事：日置弾正・上村戌亥伝，安永4年写，（大橋正真）
7. 藝目射法極秘伝記：題簽「田村流東内蔵」，宝暦5年／藝目射法極秘伝記，東内蔵院法印伝，〔江戸〕写
8. 図説誕生藝目之次第：題簽「図注誕生藝目之次第・小笠原伝・寛政4年」，小笠原長時・同貞慶伝，寛政4年写，（小池貞成等）
9. 産所藝目体拝次第：文化10年写，（外池信元）
10. 藝目鳴弦曼多羅卷細註：〔江戸〕写，（早野〔助〕左衛門）
11. 鳴弦伝（外題）：〔江戸中期〕写
12. 鳴弦藝目秘書（外題）：〔江戸〕写
13. 鳴弦相伝之時，一宮随波斎伝，享保10年写，（三宅昌成）
14. 橘家鳴弦巻極秘：〔江戸〕写
15. 橘家鳴弦巻口伝書：題簽「橘家鳴弦」三巻，玉木正英，弘化3年写，（富田通候）
16. 橘家藝目口伝秘巻：四巻，〔玉木〕正英聞書，〔江戸〕写

以上